

古今和歌集

仮名序

「やまと歌は、人の心を種と
して、万の言の葉とぞなれ
りける。世の中にある人、
事業繁きものなれば、心に
思ふことを見る物聞く物に
つけて、言ひ出せるなり。
花に鳴く鶯、水に住むかは

〔通釈〕「和歌は、人の心の中に思ふことを本に
して、いろいろの言葉をつらねて詠み
出したものである。それは草木の種が
本になつて、多くの枝や葉が茂り出す
のと同じやうなものである。この世の
中に生きてゐる人は、事業の多いもの
であるから、心にいろいろな思が起つ
てくる。そのいろいろな思を、花鳥風
月などの見る物聞く物に託して、詠み
出したのが即ち歌である。花の枝に來
て鳴く鶯や、水の中に住んで鳴くかは
づの声を聞くと、それは皆それゞに
心からうたひ出した歌である。してみ

づの声を聞けば、いきとし
いけるもの、いづれか歌を
詠まざりける。力をも入れ
ずして天地あめつちを動かし、目に
見えぬおに神がみをもあはれと
思はせ、男女の中をとこをうなをも和げ、
猛き武夫ものふの心をも慰むるは
歌なり。

「この歌、天地あめつちの闢ひらけはじ
まりける時よりいできにけ
り。

ると、生きてゐる程のもので、何か歌
を詠まないものがあらうか。歌を詠む
のは人だけではない、鳥やけだものや
虫まで、かうして皆それゞに歌を詠
むのである。力をも入れないで易々と
天地を動かしたり、目に見えない幽冥
の鬼神を深く感じさせたり、男女の間
を睦しくなるやうにしたり、荒々しい
武士の心をも慰めたりなどするのは、
皆歌の徳である。

「さてこの歌といふものは、天地開闢の
時から出来たものである。

しかあれども、世に伝はる
事は久方の天あめにしては、下した

さうであるけれども、しつかりと歌と
して世の中に伝つてきたのは、天では
下照姫の詠まれた歌からはじまり、

〔古註〕天の浮橋の下にて、女神めがみ男神おがみとなり給へることをいへる歌なり。

てるひめ
照姫にはじまり、

〔古註〕下照姫は、天稚彦の女なり。せうとの神のかたち、岡谷にうつりて輝くを詠める、えびす歌なるべし。それらは文字の数も定らず、歌のやうにもあらぬ事どもなり。

あらがねの土にしては、素^す

蓋^{さのを}鳴尊^{みこと}よりぞ起りける。千

早ぶる神代には、歌のもじ
も定まらず、すなほにし

国土では素蓋鳴尊の詠まれた歌から起つてゐるのである。神代の時分には、まだ歌の文字の数も定まってゐず、その上質朴で古風で、どういふことを詠んだものか、その歌の意味が今見つけわかりにくいくものであつたやうだ。さて人の世となつてから、あの素蓋鳴尊が詠まれた歌のやうに、専ら三十一文

字の歌を詠むやうになつたのである。

て、ことの心分き難かりけ
らし。人の世となりて、素

蓋鳴尊よりぞ、三十文字余

り一文字は詠みける。

〔古註〕素蓋鳴尊は天てらすおほん神のこのかみなり。女と住み給はむとて、出雲の国に宮造し給ふ時に、其所に八色の雲のたつを見て詠み給へるなり。八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣造るその八重垣を。

「かくてぞ花をめで、鳥を羨

「さうして、花を賞翫したり、鳥を羨ん

だり、霞を憐んだり、露の身の上を悲

み、霞を憐び、露を悲ぶ心

ことば、多くさまぐにな
りにける。遠き処も出で立
つ足もとよりはじまりて、

年月をわたり、高き山も、

麓の塵ひぢよりなりて、天

雲たなびくまで生ひのぼれ

るが如くに、この歌もかく
の如くなるべし。

「難波津の歌は、みかどの御おほん
始なり。はじめ

「さて「難波津に」といふ歌は、天子の
御事を詠んだ最初の歌である。

〔古註〕大鷦鷯帝おほさぎののみことの、難波津にてみこと聞えける時、東宮を互に譲りて、位に即き給はで、三年になりにければ、王仁わいにといふ人の、いぶかり思ひて詠みて奉りける歌なり。この花は、梅の花をいふなるべし。

あさか山の言の葉は、采女うねべ

そして「あさか山」といふ歌は、采女の戯れから詠んだ歌で、

しんだりする心や詞が、だんだん多くなりさまぐになつたのである。大層遠い所でも、最初に踏み出す足許からはじまつて、長い時日の間には行き着くことが出来、非常に高い山でも、麓の塵ほどの泥土から積り積つて、雲のたなびく程高くなつたのであるやうにこの歌も段々と広く盛んになるであらう。

たはぶ の戯れより詠みて、

〔古註〕葛城の大君を陸奥へ遣はしたりける時に、国の司こと疎かなりとて、饗応などしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、かはらけとりて詠めるなり。これに、その大君の心解けにける。

この二歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける。

「そもそも歌のさま六なり。

からの歌にもかくぞあるべき。その六種むくさの一つには、そ

の歌の六体の第一はそへ歌、第二はかぞへ歌、第三はなづらへ歌、第四はたとへ歌、第五はたゞごと歌、第六はいはひ歌である。

へ歌、

〔古註〕大鷦鷯の帝をそへ奉れる歌、「難波津にさくやこの花冬ごもり、今を春べとさくやこの花」といへるなるべし。

二つには、かぞへ歌、

〔古註〕「さく花に思ひつくみのあぢきなさ、身にいたつきのいるも知らずて」といへるなるべし。(これはたゞ言にひて、物に喻へなどもせぬものなり。この歌いかにいへるにかあらむ、その心、得がたし。五つにたゞ言歌といへるなる、これにはかなふべき。)

この二首の歌は、歌の父親母親のやうであり、子どもの手習の始めにも先づこれを習ふことにしてゐる。

三つには、なづらへ歌、

〔古註〕「君にけさ朝の霜のおきていなば、恋しき毎に消えや渡らむ」といへるなるべし。（これは物になづらへて、それがやうになむあるとやうにいふなり。この歌よく適へりとも見えず。「たちちねの親の養蚕の繭ごもり、いぶせくもあるか妹にあはすて」かやうなるや、これには適ふべからむ。）

四つには、たとへ歌、

〔古註〕「わが恋はよむとも尽きじありそ海の、浜の真砂はよみ尽くすとも」といへるなるべし。（これは万の草木鳥獸につけて、心を見するなり。

この歌は隠れたる処なむき。されど、はじめのそへ歌と同じやうなれば、少しきまを変へたるなるべし。「すまの海士の汐やくけぶり風をいたみ、思はぬ方にたなびきにけり」この歌などや適ふべからむ。）

五つには、たゞこと歌、

〔古註〕「いつはりのなき世なりせばいかばかり、人の言の葉うれしからまし」といへるなるべし。

〔別古註〕これは、「言のとゝのほり正しきをいふなり。この歌の心更にかなはず。とめ歌とやいふべからむ。」山ざくらあくまで色を見つるかな、花ちるべくも風吹かぬ世に」。

六つには、いはひ歌（なり）。

〔古註〕「この殿はうべも富みけりさき草の、三ば四ばに殿造せり」といへるなるべし。

〔別古註〕これは、世をほめて神に告ぐるなり。この歌はいはひ歌とは見えずなる。春日野に若菜摘みつゝ万代を、祝ふ心は神ぞしらむ」これや少し適ふべからむ。おほよそ六種に別れむことは、えあるまじきことになむ。

「今世の中色につき、人の
心花になりにけるより、あ
だなる歌、はかなきことの
みいでくれば、色好みの家
にうもれ木の、人知れぬ事
となりて、まめなる処には、
花すゝき、ほに出すべき事

にもあらずなりにけり。そ
のはじめを思へば、かゝる
べくなむあらぬ。古の世々
のみかど、春の花の朝、秋
の月の夜毎に、さぶらふ人々
を召して、事につけつゝ、
歌を奉らしめ給ふ。あるは

「さて今世の中は、争つて色に媚び、
人情は浮華になつたので、浮薄な歌や
たわいもない詞ばかりが出来るから、
歌といふものは、たゞ色に耽ける人の、
内証の覗弄物となつて、まじめな所へ
はおもてむきに顕して出されぬやうになつてしまつた。歌の起源を考へると、
こんな有様である訳のものではない。
昔の御代々の天子は、春の花の時分や、
秋の月夜などといふ時には、いつでも、
御身近くに仕へてゐる人々をお召しになつて、何か事がある度毎に、歌を詠
んで獻るやうに仰せ付けられた。さう

花をこふとてたよりなき所
にまどひ、あるは月を思ふ
とて、しるべなき闇にたど
れる心々を見給ひて、
愚おろかなりとしろしめしけむ。
しかあるのみならず、さゞ
れ石にたとへ、筑波山にか
とて、君をねがひ、よろ
こび身に過ぎ、たのしみ心
に余り、富士の煙けぶりによそへ
て人を恋ひ、松虫の音に友
をしのび、高砂たかさご、住の江の
松も、あいおひのやうに覚え、男山の昔を思ひいでて、

写つてみえる自分の白髪や皺が多くな
つてくるのを歎いたり、草葉に置く露
や水に浮く泡などに自分の生命をたと
へて、そのもろくはかないことに驚い
たり、或は昨日までは榮耀豪奢を極め
た人が、今日は勢力を失つて世に捨て
られ、昨日まで親しかつた人が俄に疎
遠になり、或は松山の波や、野中の清
水に自分の思を寄せたり、秋の萩の下
葉をながめたり、曉の鴟の羽搔をする
数をかぞへたりして独り淋しがつたり、
或は身のつらい事を人に話したり、吉
野川を喩にひいて世の中を恨んだりし

た喜びや、心に余る程の楽しみのある
時、或は富士の煙に寄せて人を恋しく
思ひ、或は松虫の音を聞いて友だちを
慕ひ、年をとつては、高砂や住の江の
松も自分と同じ齡に生ひ立つものゝや
うに思ひ、又年老いた男が、男盛りで
あつた昔のことを思ひ出し、年老いた
女が、花のやうになまめかしかつた昔
のことを思ひ出してくよくくする時に
も、すべて歌を詠んで自分の心を慰め
たのである。又、春の朝に花の散るの
を見たり、秋の夕暮に木の葉の落ちる
音を聞いたり、或は来る年毎に、鏡に

女郎花の一時くねるにも、

歌をいひてぞ慰めける。ま

た、春の朝に花の散るを見、

秋の夕暮に木の葉の落つる

を聞き、あるは年毎に鏡

の影に見ゆる雪と波とを歎

き、草の露、水の泡を見て、

我が身を驚き、あるはきの

ふは栄えおごりて、けふは

時をうしなひ、世にわび、

親しかりしも疎くなり、あ

るは松山の波をかけ、野中

の水を汲み、秋萩の下葉を

ながめ、暁の鷗のはね搔を

てきたのに、今では、永久な物のため
しに引いた富士山の煙も立たぬやうに
なり、長柄の橋も新しく架けかへられ
るやうになつたと聞く人は、世の転変
の甚しい歎を、歌を詠むことによつて
のみ慰めたのである。

数へ、あるは呉竹の憂きふ
しを人にいひ、吉野川をひ
きて世の中を恨み来つるに、

今は富士の山の煙も立たず
なり、長柄^{ながら}の橋もつくるな
りと聞く人は、歌にのみぞ
心を慰めける。

「古^{いにしへ}より、かく伝はるうち
にも、奈良の御時よりぞ弘
まりにける。かのおほん世
や、歌の心をしろしめした
りけむ。かの御時に、正^{おほき}

「ずっと昔から、かういふやうに传つて
きたうちにも、取り分けて奈良の御代
から盛に詠まれるやうになつたのであ
る。その御代に、柿本人麻呂といふ
人が歌の聖人であつた。又、山部の赤
人といふ人がある。この人も歌が不思
議に上手であつた。人麻呂は赤人の上
に立つことが出来にくく、赤人は人麻
呂の下に立つことが出来にくかつた。

三位 柿本の人麻呂^{ひとまろ}なむ、
歌の聖^{ひじり}なりける。これは君

もひとも、身をあはせたり
といふなるべし。秋のゆふ
べ、立田川に流るゝ紅葉を
ば、帝のおほん目には錦と
見給ひ、春のあした、吉
野の山の桜は、人麻呂が心
には雲かとのみなむ覚えけ
る。又、^{やまべ}山部の赤人といふ
人あり。歌にあやしく妙な
りけり。人麻呂は、赤人が、
上に立たむ事難く、赤人は、
人麻呂が下に立たむ事難く
なむありける。

渡らば錦中や絶えなむ」人麻呂「梅の花それとも見えず久方の天ぎ
る雪のなべて降れゝば」「ほのぐ」と明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟
をしづおもふ」赤人「春の野にすみれ摘みにと来しわれぞ野をなつか
しみ一夜寝にける」「わかの浦に潮みちくればかたをなみ蘆べをさし
てたづ鳴きわたる」。

この人々をおきて、又すぐ
れたる人も、呉竹のよゝに
聞え、片糸かたいとのよりくに絶
えずぞありける。これより

さきの歌をあつめてなむ、
万葉集となづけられたりけ
る。かの御時よりこのかた、
年は百年に余り、世は十代も、とせ
になむなりにける。

「こゝに古のこととも、歌の
心をも知れる人、詠む人多

「その間に、昔の事や歌の本旨などをよ
く知つてゐる人、又それをよく知つて
歌を詠む人は多くなく、わづかに一人

この二人の他にも、歌に秀でた人は、
各時代々々に顯れて、絶えたことがな
かつた。さて、この奈良の時代までの
歌を撰集して、それを「万葉集」と
名づけられたのである。その時代から
こちらへ、年数は百年余りになり、天
皇の御代数は十代目になつてゐる。

からず、わづかに一人二人なりき。しかあれど、これかれ、得たる所得ぬ所、互になむある。今この事をいふに、官位つかさくらる高き人をば、たやすきやうなれば入れず。そのほかに、近き世にその名聞えたる人は、即ち、僧正遍昭は、歌のままは得たれども、まことすくなし。たとへば、絵にかけらる女をうなを見て、いたづらに心を動かすが如し。

(古註)「浅みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春のやなぎか」、「はちす

二人である。しかもその一人二人の人でさへ、どれも十分な歌人ではなくて、互に得失がある。今その得失を論じようと思ふが、官位の高い人は、余り軽く扱ふやうで無礼であるから、遠慮して論評の中には入れない。その他で、近世で歌人であるといふ名声の聞えた人を挙げると、先づ僧正遍昭は、歌の体裁はよく捉へ得てゐるけれどもその歌には誠実の意が乏しい。これを物に喻へてみると、上手に描かれた美人画には、徒に人の心を動かす美はあるけれども、生きた真実の精神がないやうなものである。

葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」、嵯峨野にて、馬よりおちて詠める「名にめでゝおれるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな」。

在原業平は、その心あまりて言葉足らず。いはゞ、しほめる花の、色なくて匂にほひ残れるが如し。

(古註)「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」、「おほ方は月をもめでじこれぞこの積れば人のおいとなるもの」、「ねぬる夜の夢をはかなみまだろめばいやはかなにもなりまするかな」

ふんやのやすひで
文屋康秀は、詞はたくみにて、そのまま身におはす。
いはゞ、商人のよききぬ著たらむが如し。

(古註)「ふくからに野辺の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ」、深草のみかどの御国忌に「草ふかきかすみの谷に影かくしてゐる日のくれしけふにやはあらぬ」

宇治山の僧喜撰は、詞かす

在原業平の歌は、心が余つて言葉がいひ足らない。ちやうど、しほんだ花の色はなくなつて、その匂だけがまだ残つてゐるやうなものである。

文屋康秀の歌は、詞の用ゐ方が巧妙であつて、その技巧が内容に相応しない。

喻へていふと、心の卑しい商人が、身に不釣合な美服をまとうたやうなものである。

宇治山の僧喜撰の歌は、言葉が幽玄であるけれども、その一首の意味が始終

かにして、始終はじめをはりたしかなら

ず。いはゞ、秋の月を見る

に、暁の雲にあへるが如し。

を貫徹してゐない。喻へていふと、秋の月を見てゐるのに、暁の雲が出てきて月をかくしたやうなものである。

〔古註〕「わが庵は都のたつみ鹿ぞすむ世をうぢ山と人はいふなり」よめる歌

多く聞えねば、これ彼れを通はしてよくしらず。

小野をの小町こまちは、古いにしへの衣そ通とほり姫ひめ

のながれなり。あはれなや

小野小町の歌は、感情があふれてゐるやうであるけれども、強いところがない。喻へていふと美人に何か悩むところがあるのに似てゐる。

うにて、強からず。いはゞ、

よき女の悩めるところある

に似たり。強からぬは、女をうな

の歌なればなるべし。

〔古註〕「思ひつゝぬればや人の見えづらむ夢としりせばさめざらましを」、「色見えてうつろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける」、「わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」、そとほり姫の歌「わがせ子が来べきよひなりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねでしるしも」

おほとものくろぬい
大友黒主は、心はをかし

くて、そのさまいやし。い

はゞ、たき木おへる山人の、

大友黒主の歌は、その心は面白いが、
その体裁はいやしい。喻へていふと、
たき木を負うた賤しい山家爺が、花
の木の下で休んでゐるやうなものであ
る。

花の蔭にやすめるが如し。

〔古註〕「おもひいで恋しき時は初雁のなきてわたらんと人は知らずや」、「かゞ
み山いざ立ち寄りて見て行かむ年へねる身は老いやしぬると」

この他の人々、その名聞ゆ

この他の人々で、歌人としての名の世
に聞えてゐる人は、野原に生えてゐる

る、野辺におふる葛の這ひ
ひろごり、林にしげき木の
葉の如く多かれど、歌との
み思ひて、そのさま知らぬ
なるべし。

葛のやうに充满し、林に繁つてゐる木
の葉のやうに沢山あるけれども、いづ
れも皆、只漫然と歌だと思つてゐるだ
けで、歌の本旨といふものを心得てゐ
ないのであらう。

「かゝるに、今、すべらぎの
天の下しろし召すこと、四よ

「さうであるのに、今上天皇の御治世も、
今年で九年目になる。どこからどこま
でも洩れた所のない君の御慈愛は、遠

つの時、九このがへりになむ
なりぬ。あまねきおほん
うつくしみの波、八島はしまのほ
かまで流れ、ひろきおほん
めぐみの蔭、筑波山つくばさんの麓よ
りも繁くおはしまして、万よろづ
の政まつりごとを聞きし召めしすいとま、

諸々もうろくの事を捨て給はぬあま
りに、古いにしへの事をも忘れじ
旧ふりにし事をも興し給ふと
て、今もみそなはし、後の
世にも伝はれとて、延喜五

年四月十八日に、大内記紀
の友則、御書ふみの所のあづか

く國の外ほかまでも行きわたり、広く渥
い君の御恩恵は、筑波山の蔭よりも繁
くすべての人の上に行きわたつてゐる、
有難い御治世で、いろいろの御政事を
行はせられる御ひまくに、文学技芸
一切の事を御奨励なさる余りに、神代
以後の代々の帝が侍臣等に歌を詠ませ
られた事や、万葉集の撰定があつた事
などを忘れず、それらを再興遊ばされ、
又後々の世にも伝はれと思召されて、
延喜五年四月十八日に、大内記の紀友
則、御書所預の紀貫之、前の甲斐少目

り紀の貫之、前の甲のさう

せられた。それがすべて千首あまりで、

二十巻になつた。名づけて古今和歌集

官 凡河内躬恒おふしがふちのみつね、右衛門の

といつた。

府生壬生忠岑ふしゃうみぶのたゞみねらに仰せられ

て、万葉集に入らぬふるき

歌、みづからのも奉らし
め給ひてなむ、それが中に、
梅をかざすよりはじめて、

時鳥を聞き、紅葉を折り、
雪を見るにいたるまで、又、

鶴龜につけて君を思ひ、人

をも祝ひ、秋萩夏草を見て

妻を恋ひ、逢坂山にいたり

て手向たむけを祈り、あるは春夏

秋冬にも入らぬくさぐさの

歌をなむ撰ばせ給ひける。

すべて、千歌はた巻。名づけて古今和歌集といふ。

「かく、この度集め選ばれて、山した水の絶えず、浜の真砂の数多く積りぬれば、今は飛鳥川の瀬になる恨も聞えず、さざれ石のいはほとなるよろこびのみぞあるべき。それわれら、詞は、春の花の匂少くして、空しき名のみ、秋の夜の長きをかくてれば、かつは、人の耳におそり、かつは歌の心に

「かうして今度この歌集が出来て、斯道の流は絶えず、名歌も数多く集つた事であるから、今から後は歌道の衰頽するといふ恨もなく、さざれ石が巖となるやうに、ますく榮えて行く喜ばかりがあるべきである。さて私達は、詞はまだ稚拙であつて何の妙味もないの

に、虚名だけは、此の集を撰んだといふことにかこつけて、歌道に長けてゐるやうにいひ立てられたから、一方では人の聞く所を憚り、又一方では歌に對して恥ぢ入る次第ではあるけれども、立つても居ても寝ても覚めても、自分達がかういふ聖代に生まれて、歌集勅撰の美挙のある時にあつたのを嬉しく思つてゐる。歌聖人麻呂は既になくなつてゐるけれども、歌道は滅びないで、この古今和歌集に残り留まつてゐることよ。上古のやうに歌はあつても、文字がなければ後世に伝へる術は

はぢ思へど、たなびく雲の
立ちる、啼く鹿のおきふし
は、貫之らが、この世に同じく生まれて、この事の時にあへるをなむよろこびぬる。人麻呂なくなりにたれど、歌のこととゞまれるか

な。たとひ、時移り事去り、たのしび悲しみゆきかふとも、この歌の文字あるをや。

青柳あやぎの糸絶えず、松の葉の散り失せずして、まさ木のかづら長く伝はり、鳥の跡久しくとゞまれらば、この

ないが、たとへ時世は変遷し、諸事は盛衰しても、万の事を興し給ふ聖代には、この歌の文字といふものがあるから、誠に幸である。この歌集が、世に絶えず散佚しないで、永久に伝つたらば、その後の世に於いて歌の本旨をも知り、この歌集の勅撰された事情をも弁へた人は、この歌集によつて、大空の月を見るやうに、古代を仰ぎ尊び、この歌集の出来た今の世を恋ひ慕はないであらうか。

歌のさまをも知り、事の心
をも得たらむ人は、大空の

月を見るが如くに、古を仰
ぎて、今を恋ひざらめかも。
